歴史地理学　56－1（268）50-59　2014. 1

近世中期における庶民の伊勢・京参り

―越中砺波郡矢木村宗四郎を事例として―

佐　伯　安　一

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．越中砺波郡矢木村宗四郎について
Ⅲ．宗四郎の第１回伊勢・京参り
Ⅳ．宗四郎の第２回伊勢・京参り
Ⅴ．まとめ

Ⅰ．はじめに

矢木村は富山県の西部，庄川扇状地（砺波平野）の農村で，近世は越中国砺波郡に属した。現，砺波市庄下地区の集落である。

根尾宗四郎家（当主根尾紘一氏）は代々宗四郎を名乗り，農地解放前は持高2,000石と称された砺波地方きっての素封家であった。

当家には後述するように天正２（1574）年，織田信長から所領を得た朱印状[1]を所蔵するが，それ以外の文書は存外に少なく，延享元（1744）年の草高分与状など私的文書数通を蔵するばかりである。その中にここに紹介する江戸中期の伊勢・京参りの旅日記２冊があった。

史料１（図１）「私幼少之時道仲小遣覚，享保十七年子六月八日より七月八日迄，矢木村宗八[2]」（以下「享保17年帳」と略称）

史料２（図２）「此方并かか，おりせ[3]，とも壱人連上下四人参宮仕時の同中遣入用覚帳，明和六年丑六月三日より同七月九日帰り，矢木村宗四郎」（以下「明和６年帳」と略称）。

ともに２代宗四郎（正徳３（1713）年生まれ～寛政元（1789）年没　数え79歳）のもので，彼は一生のうちに２回，伊勢・京参りをしたのであった。八つ折の手帳で，旅行時に携行したものらしく，手垢に汚れている。ただし，享保17年帳は「私幼少之時…」とあるので，表紙は後に改めたのであろう。

近世における庶民の旅は，近世後期の化政

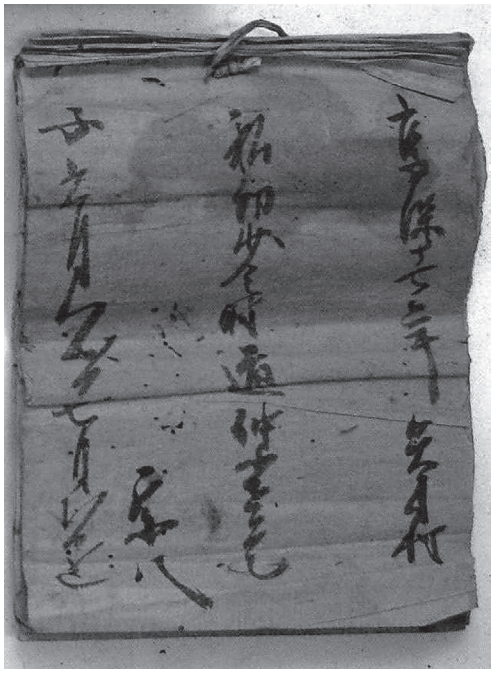

図１　享保17（1732）年
「私幼少之時道仲小遣覚」

キーワード：伊勢参り，京参り，旅日記，砺波郡

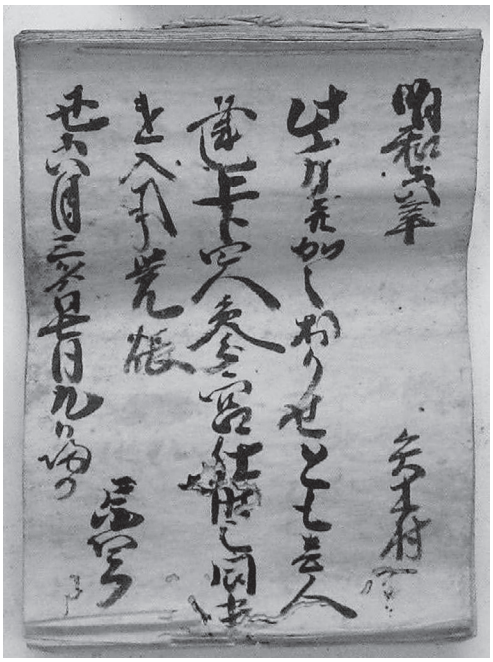

図２　明和６（1769）年
「此方并かか，おりせ，とも壱人連上下
四人参宮仕時の同中遣入用覚帳」

期以降に盛行するが，本稿で紹介する宗四郎の旅はそれ以前の早い時期のものである。内容は宿泊地，通過地点の行程，宿泊賃，小使等の費用を克明に記録しているため，当該期の旅の実態を具体的に知ることができる好史料である。

Ⅱ．越中砺波郡矢木村宗四郎について

根尾家の歴史についてはこれまで報告したことがあるので[4]，ここでは根尾家と２代宗四郎について必要程度の紹介をしておく。

先祖は美濃国西北部で越前国境の根尾谷にいた豪族で織田信長に仕え，天正２（1574）年５月，信長から越前国小山七郷を宛てがわれた朱印状を受けている。１世は天正10（1582）年，本能寺の変で戦死したため，２世は越中国庄下郷へ移住し帰農した。天正13（1585）年の飛越地震で東遷した庄川の旧河川である千保川跡の開発に着手し，庄下舘村を立てた。以後５世のときの明暦２（1656）年には，庄下舘村の御印高は342石までになっている。ところがそのあと庄川の流水が元の千保川跡へ流れこんだために，13年後の寛文９（1669）年までの間にそのほとんどを失っている。８世宗四郎の宝永５（1708）年，隣村矢木村へ移住し，移住後の初代[5]となった。このとき矢木村で４石５斗の高を取得し，これが草高集積の出発点となった。ちょうど加賀藩が切高を解禁した元禄の切高仕法の直後にあたる。以後没年の寛延元（1748）年までに持高は228石となった。

そのあとをついだ２代宗四郎（本稿の対象）は210石を追加し，没年の寛政元（1789）年には438石となった。以後歴代持高を増やし，７代宗四郎の明治３（1870）年には696石余の大地主に成長している。

Ⅲ．宗四郎の第１回伊勢・京参り

宗四郎の初回の伊勢・京参りは，享保17（1732）年，宗四郎が数え20歳のときである。帳面に記載されている「宗八」は，宗四郎の幼名である。父母はまだ存命していた。この年は全国的に「伊勢ぬけ参り」ブームのあった享保15年から２年後にあたる[6]。

帳末の記載に「伊勢小遣中間当たり」とあるから，一人旅ではなく何人か若者仲間の旅だったようである。矢木村を6月8日に出発し，7月8日に帰宅している。陽暦に換算すると，6月29日から7月28日まで29泊30日間で，炎天の時期にあたる。田植後の稲は生長し，盆前までの農閑期である。

コースは表１および図３のとおりである。往路は北国街道ではなく，五箇山から入って飛騨・美濃を通っている。帰路も越前の大野・勝山から白山下の大日峠を越えて加賀の小松へ抜けている。山路ではあるが，難路を厭わず，少しでも短距離を選んだようである。

表 1　享保17（1732）年コース

	6/8	矢木		紀伊	6/22	●高野紙江	
		○城端		河内	23	●三日市	＜河内長野市＞
	8	●赤尾		和泉		○堺	
飛騨		○小白川		大坂	24	●大坂	
	9	●平瀬			25	●　〃	
		○中野		京都	26	●京都	
美濃		○八幡			27	●　〃	
	10	●歩岐島（ホケシマ）	＜郡上市＞		28	●　〃	
	11	●三日市	＜郡上市＞		29	●　〃	
尾張	12	●伊山	七里半渡し		7/1	●　〃	
伊勢	13	●桑名		近江	2	●武佐（ムサ）	＜近江八幡市＞
	14	●川（川越か）			3	●速水（ハヤミ）	＜長浜市＞
		○津		越前	4	●今庄	
	15	●小俣（オバタ）			5	●長崎	
		○伊勢宮参り				○大野	
	16	●伊勢		加賀	6	●小松	
	17	●津			7	●金沢	
伊賀	18	●島ヶ原			8	矢木	
		○笠置～加茂					
大和	19	●奈良					
		○当麻（タイマ）					
	20	●八木（ヤギ）	＜橿原市＞				
	21	●吉野					

●泊り　○通過　→矢印はコースの記載誤り

出典：根尾家文書　享保17年帳

享保17年帳記載例

（6 月）

同十八日

十三文　島ヶ原宿賃

同

四十六文　米代

同

四文　わらし

十六文　笠置より加茂迄弐里川舟

大引申分

同十九日

一，弐匁弐分　奈良替

代百八十九文取　但五厘きれ

同十九日

五十弐文　奈良宿賃

同

四十五文　米代

同廿日

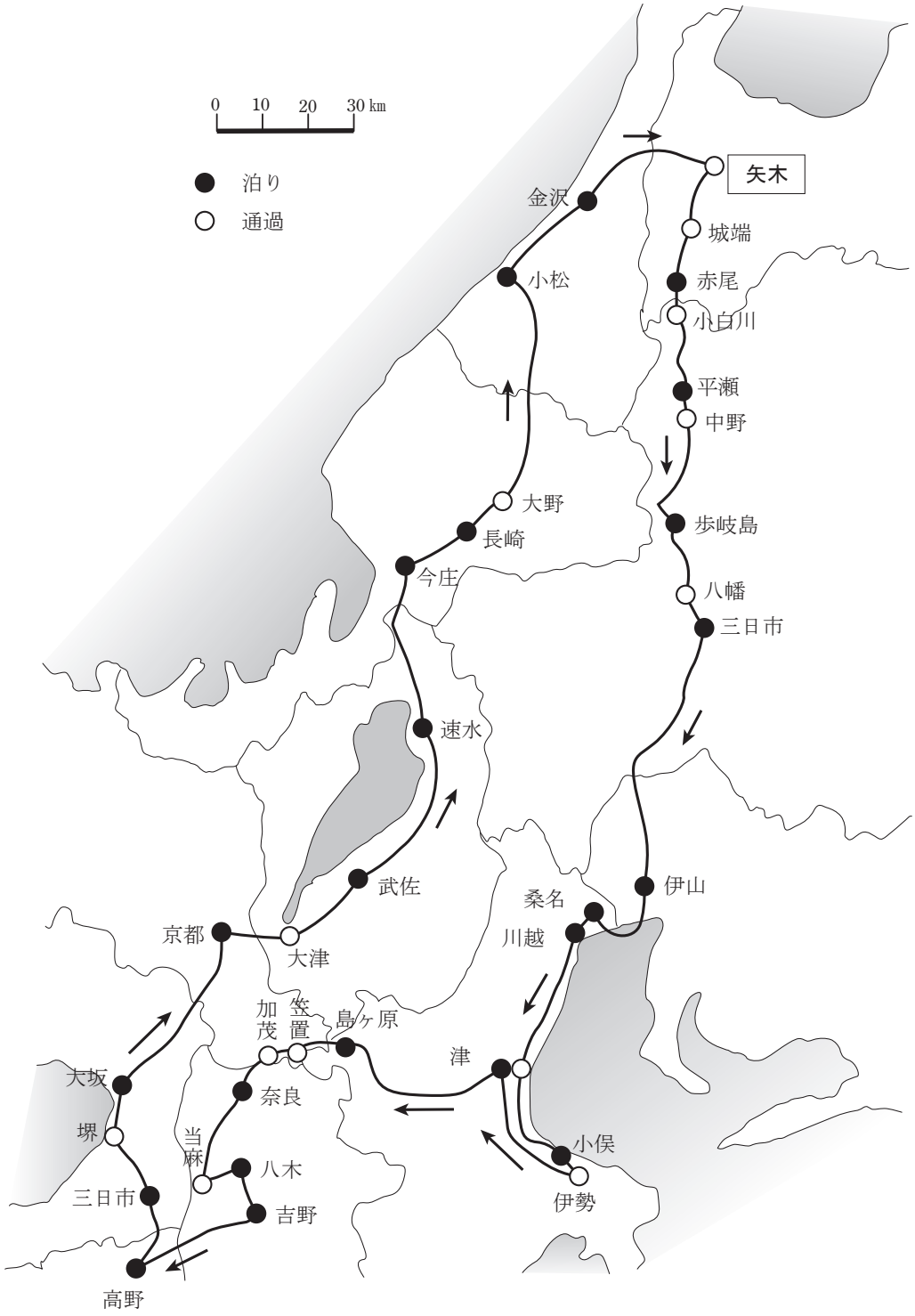

図 3　矢木村宗四郎伊勢・京参りコース（享保17年）

出典：根尾家文書　享保17年帳

六文　　奈良ひる喰菜
同
廿文　　みやかし
同
九文　　当麻曼荼羅寺開帳仕
同
三文　　酒代
同廿日
十八文　八木町宿賃
同
四十文　米代
同廿一日
七文　　茶屋ひる喰菜
同
四文　　わらし
同
四文　　御みやかし
同廿一日
十五文　吉野宿賃
同
四十七文　米代

6月8日に居村を出発して城端から小瀬峠を越えて五箇山へ入り，床川沿いに遡って赤尾で1泊。翌9日は赤尾と小白川の関所で関賃を払って飛騨白川へ入り，平瀬泊まり。10日は照蓮寺のある中野を通り，美濃国へ入って長良川沿いに南下し，歩岐島（郡上市）で1泊。帳面では中野・歩岐島間に八幡（郡上八幡）と記しているが，八幡は歩岐島より南なので記帳の誤りであろう。翌11日は郡上八幡を通って三日市（郡上市）泊まり。12日は尾張国へ入って伊山に泊まっている。

13日は舟路の「海上七里半渡し」で伊勢国桑名へ着いて1泊。舟賃6文，渡し賃45文で，ほかに舟頭が1文とっている。14日は川（川越か）泊まり。15日は津を通って伊勢宮直前の小俣泊まり。16日は伊勢宮へ参詣して1泊。17日は戻って津泊まり。18日は伊賀街道で伊賀国へ入り，島ケ原で1泊。翌19日は笠置・加茂を通って大和国へ入り，奈良で見物したあと1泊。20日は当麻，「たいままんたら買（開）ちやう仕」とあるから曼荼羅寺の開帳に遭遇したのであろう。その日は八木（橿原市）で1泊。21日は吉野へ向って見物したあと1泊。22日は南下して高野山麓の紙江で1泊。「こやく（膏薬）買」とあるから相当疲れたのであろう。23日は高野山へ参詣したあと三日市（河内長野市）で1泊している。

24日は堺を経て大坂入り，住吉社参詣。大坂では24日・25日と2泊して，見物したり芝居をみたりして26日夕方京都着。ここで26～29日（6月は小の月でこの日で終り）と7月1日と5泊して，ゆっくり見物したり，芝居を見たり，土産を買ったりしている。「口中氷」とあるから，暑さしのぎに氷を買って口に含んだのであろう。

7月2日から帰路につき，武佐（近江八幡市），3日は速水（長浜市）で各1泊。4日越前入りして今庄，5日長崎で各1泊。6日は山路コースをとり，大野・勝山を通り大日峠越えで加賀入りして小松で1泊。7日は金沢で1泊して，7月8日に帰村した。

費用は合計3,127文。一文銭は重いので，銀を持参して所々で銭に替えて使っている。銭替えの記載例は次のようである。

一，弐匁弐分　奈良替
　　代百八十九文取

189文を2.2匁で割ると，指値は86文であることがわかる。合計3,127文を銭替えの指値の平均1匁＝85文で割ると，銀36.8匁となる。この年の越中の米価は3月30匁，7月40匁であったので，平均35匁とすると，米1石あまりである。金の使い方は，前記記載例に見るように，宿では宿賃を払い，米を買っているから，恐らく自炊して夕食・朝飯と昼の弁当に充て，宿では菜と汁だけを出してもらったのであろう。道中途中の支払いは，舟渡し賃，昼の菜，酒手，たばこ，おみやかし（賽銭），わらじ代くらいで，質素な旅である。

土産も京都で購入したお香くらいで，たいしたものは買っていない。関所賃は越中・飛騨境の赤尾と小白川だけで，あとは見えない。

全里数は200里（800km）ほどと思われるが，これを24日（30日から京・大坂の滞在6日を引く）で割ると，1日8里半（34km）ほどになる。

Ⅳ．宗四郎の第2回伊勢・京参り

宗四郎が再度伊勢・京参りをしたのは明和6（1769）年，数え57歳のときである。前回から37年後にあたる。草高の集積はその後も進み，持高は417石に増えている。この間には宝暦5（1755）年，加賀藩の「銀札崩れ」[7]（新銀札発行の失敗）に逢い，大損もしている。金ばかり持っていても仕方がないから，少しは使った方がよいという思いがあったのであろうか。今回は妻と娘おりせを供に下男を連れての4人旅であった。

矢木村を6月3日に出発して，7月9日に帰宅している。陽暦に換算して7月6日から8月10日まで，炎天下の35泊36日間である。前回と同時期の農閑期にあたる。コースは表2および図4のとおりである。前回と違って北国街道を往復し日数も多い。年老いたのと女連れであったので，平坦な道を選んだのであろう。

明和6年帳記載例

（6月）

同十七日　三本松よりたんぱ市迄
　　七里半余ニ而泊りたんぱ市
一、百六拾三文　米代七拾文かへ
一、八拾八文　同所宿賃
一、十文　わらし弐速代
一、四拾七文　そめん并酒代等
一、十弐文　長谷ニ而御みやかし
　　〆三百弐拾文遣
六月廿九日　大津より市川（愛知川）迄十弐
　　里きて泊り
一、弐升四合五勺　米六八かへニ〆
一、八拾八文　右宿賃但一人弐十弐文つゝ
一、三拾弐文　わらし四速代
一、弐拾八文　昼喰汁代
一、弐文　火なわ　壱筋

加賀から越前を通り，栃ノ木峠を越えて近江の柳ヶ瀬へ出て，6月9日には米原泊まり。このあと愛知川（えちがわ）あたりで北国街道を離れて10日は岡本（東近江市）泊まり。11日は東海道へ出て鈴鹿峠を越え，伊勢の関で1泊。そこから伊勢別街道へ入り，12日は津の雲津宿，13日は小俣で各1泊。14日に伊勢参宮を終えて松坂泊まり。そのあと奈良を目ざして15日は垣内（かいと）（津市），16日は大和へ入って三本松泊まり。17日は長谷寺に参詣して丹波市（たんばいち）（天理市）泊まり。18日は奈良見物をして生駒山地鞍部のくらがり峠泊まり。19日は大坂に入り，ここで19日から21日まで3泊。「見物仕，案内頼賃十六文」とある。大坂芝居や竹田芝居を見ている。「大豆粉弐文」とある。きな粉をなめながら芝居を見ていたのであろうか。

22日は淀で1泊，23日に京都へ入る。京都では三条小橋の宿に23・24日と2泊，烏丸近江屋に25・26・27日と3泊，京都ではあわせて5泊したことになる。どこを見物したのかは書いてないが，後記するように土産をどっさり買っている。28日から帰途につき，大津・愛知川・速水・中ノ河内と泊まりを重ね，7月3日には栃ノ木峠を越えて越前へ入る。今庄・麻生津・金津と泊まりながら，6日に加賀へ入って小松泊まり。7・8日と金沢で2泊して，9日に帰村した。

全コースの里数はわからないが，6月14日の松坂以降金沢へ着くまで，毎日の里数を書いている。それは4里から12里までで，平均すると1日7里半となる。昔は1日10里といったが，それからするとやや軽い。女連れであるからこのくらいであろうか。途中，6月12日の雲津から津まで「百文，津迄四里之

表 2　明和 6 (1769) 年コース

	6/3	矢木			6/17	●丹波市　＜天理市＞	7 里半
加賀		○津幡				○長谷	
	3	●金沢			18	●くらがり峠	
		○手取川		奈良		○奈良	
	4	●小松		大坂	19	●大坂	4 里
		○大聖寺			20	●　〃	
越前		○吉崎			21	●　〃	
	5	●金津			22	●淀	
		○福井		京都	23	●京都三条小橋	
	6	●麻生津			24	●　〃	
	7	●今庄			25	●京都烏丸近江屋	
		○府中（武生）			26	●　〃	
近江	8	●柳ヶ瀬（栃ノ木峠越）			27	●　〃	
		○長浜		近江	28	●大津	
	9	●米原			29	●愛知川（エチカワ）	12里
	10	●岡本	＜東近江市＞		7/1	●速水	4 里
伊勢	11	●関			2	●中ノ河内	7 里
	12	●雲津		越前	3	●今庄	5 里
	13	●小俣			4	●麻生津	8 里
		○伊勢参宮			5	●金津	7 里
	14	●松坂		加賀	6	●小松	9 里
	15	●垣内（カイト）	＜津市＞　7 里		7	●金沢	8 里
大和	16	●三本松	＜宇陀市＞　9 里		8	●　〃	
				越中	9	○倶利加羅	
						○石動	
						矢木	

●泊り　○通過　　→矢印はコースの記帳誤り

出典：根尾家文書　明和 6 年帳

内，かゝ・おりせ，馬に乗る」という記載があり，妻と娘を馬に乗せたことがわかる。

この道中記では見物場所の記録が少なく，ありがたいとか，楽しい，苦しい，うまい，といった感動がわからない。しかし，京都ではたくさん，異常なほど土産を買っている（表 3）。その多彩な土産から旅の興奮が伝わってくる。

帳末に総費用を次のようにまとめている。

道中遣銭　168匁.19（1 人当り42.匁045）
土産代　257匁.11
計　425匁. 3

道中の遣銭を 4 人で割ると 1 人当り42匁あまりとなる。この年の越中の米価は53匁であ

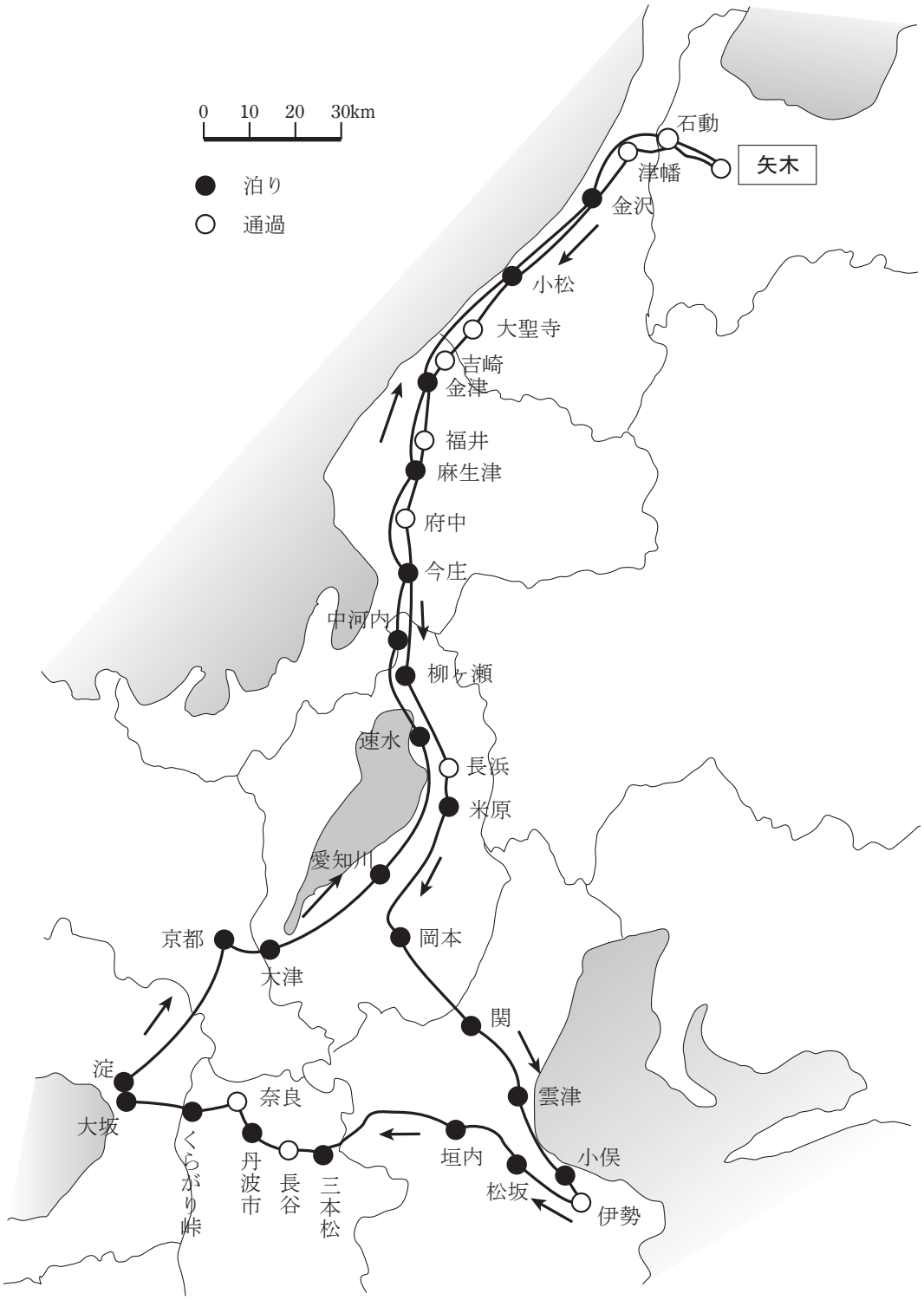

図 4　矢木村宗四郎　伊勢・京参りコース（明和 6 年）

出典：根尾家文書　明和 6 年帳

表 3　土産買物覚

6/23～27	京都					
48匁	男三徳（鼻紙袋）	3つ		164文	上扇	
13匁45	たばこ入	7つ		260文	中扇	
55文	〃	1つ		90文	中上扇（平ほね）	
213文	汗ふき	4つ		240文	中平	20本
715文	手のこい	13		265文	絹女帯	
30文	女三徳	1つ		53文	かみすり	1丁
100文	おりせに数珠	1つ		125文	たばこ切	1丁
100文	上沈香					
60文	下沈香		7/3	今庄		
430文	どびん・やくわん			12文	かみゆいくし	3枚
140文	きせる	7本				
14文	〃	1本	7/9	金沢		
32文	〃	1本		196文	円重丹	はは様へ
25文	菓子けひよ、台ふき	1つ		184文	砂糖100目	はは様へ
97匁5	おりせに、くし・こうがい・銀のかんざし	3品	7/9	石動		
				600文	茶	6斤

出典：根尾家文書　明和6年帳

るから，米1石にも満たない。それに対して土産代は米5石に相当し，1人当たりの費用の6倍にもなる。

それにしても，よく食べている。毎日の宿屋での買米量は4人で2升6合から3升であるから，1人当たり6合5勺から7合5勺になる。昔の人はよく歩いたから，食も太かったのである。

V．まとめ

富山県は浄土真宗の篤信地帯で，信徒はカミマイリ（上参り）といって京都の本山へ参詣するのを一生の願いとしていた。矢木村宗四郎の旅はそれが盛行する以前の事例である。また，手帳の表題を「参宮」としているように，伊勢参宮も主目的地のひとつであった。そして，この両地点の間にある高野山・奈良・大坂もコースとしている。

庶民の旅は信仰と遊山をかねたもので，また，ムラから外の世界を見る機会でもあった。近世初期にはムラから離れることの規制や経済的な理由によって旅は困難であったが，元禄ごろからそれらの条件は次第にゆるみ，化政期以降は旅の施設も整えられて，庶民の旅は急激に繁盛した。

その旅日記などの資料は筆者の見た限りでは幕末のものばかりで近世中期の状況は不明であったが，本史料によってその空白を埋めることができた。

本史料は，宗四郎が見物した場所の具体的な記載や感想は少ないものの，実際の行程と費用が丹念に記録されていることに特徴がある。それは，草高集積の姿勢にみられるように，経済観念の強いことのあらわれであると思われる。また，明和6年帳の土産の詳細な記録（表3）は，帰宅後各所へ配るためのものと思われ，宗四郎と親類や近隣の交際の関係を示す好資料である。

（砺波市立砺波散村地域研究所）

〔注〕

1) 佐藤　圭「根尾宗四郎家文書」一乗谷朝倉氏遺跡資料館古文書調査資料23，1994，1-4頁。
2) 宗八は2代宗四郎の幼名。
3) おりせは娘。
4) 佐伯安一「矢木」（砺波市史編纂委員会『砺波市史資料編5集落』砺波市，1996），123-143頁。佐伯安一「近世地主根尾家の生成」，砺波散村地域研究所研究紀要29，2012，1-11頁。
5) 根尾家には系図が2種ある。ひとつは「藤原氏系図」と頭書する軸装のもので，宇都宮氏の祖朝綱（子息朝重は源頼朝に仕える）の11代後胤の朝次を根尾氏の祖とし，10世の宗朝までを記している。それぞれの没年を記すが10世宗朝には「宝暦七年生レ」とあるだけで没年が記されていないので，この代に整備されたものと思われる。もうひとつは，宝永5年（1708），庄下舘村から矢木村へ移った8世宗重（宗四郎）を初代とするもので，前者とは8・9・10世が1・2・3代と重なる。これは明治期に根尾家に入った8代宗四郎が整備したもので，当家では現在これを用いている。前者を「根尾家系図（前期）」，後者を「根尾家系図（後期）」とし，本稿では歴代の表記を前者は「世」，後者は「代」と区別して記す。
6) 西垣晴次『ええじゃないか』新人物往来社，1973，216頁。
7) 加賀藩の銀札崩れの事例として根尾家文書が以下に引用されている。富山県編『富山県史通史編Ⅳ近世下』富山県，1983，1042頁。